６．文化における左右の意味

(1)　右・左の言葉の使い方

右・左の漢字の成り立ちを記述する。篆書で右は であり、左は である。 は右手を表し、 は左手を表す。右の「口」に相当する部分は、神を呼び寄せる祝詞を納める容器であり、それを右手でもつことになる。左の「工」に相当する部分は、容器を支える器台であり、左手でもつことになる。書き順は「手」を先に書き、ついで「腕」を書く。したがって、右は「ノ」を先に、「一」を後に書く。左は「一」を先に書き、「ノ」を後に書くことになる。（中森義宗・衛藤駿・永井信一『増補美術における右と左』中央大学出版部 1980、p.166）。

日本でも西洋でも、「右」は良い意味で、「左」は悪い意味で使われる傾向がある。日本で左のつく言葉は、左遷（地位が下がること）・左前になる（商売がうまくいないで、経営が困難になること）・左巻き（頭の働きが遅いこと）・左計（正しくない計画）など、良くないことで使われる。例外は、左団扇（安楽に暮らすこと）がある。それに対し、右は「たすける」「重んじる」という好意的な意味がある。

西洋においても、英語で右 right は「正しい」という意味がある。左 left は、たとえば left out は「無視される。仲間外れにされる」という意味である。ラテン語の左に由来する sinister は「不吉・縁起が悪い」、ラテン語の右に由来する dexterous あるいは dextrous は「巧みな・器用な」を意味する。フランス語の左 gauche は「ゆがんだ・ぎこちない」を、右 droit は「正義・正直・まっすぐ」を意味する。ドイツ語の左は link で linkisch は「ぎこちない」、右 recht は「正義・正しい」である。イタリア語の左手 stanca は「疲れた」、スペイン語で左手は zurdo で、a zurdas は「まちがった」を意味する。（M.ガードナー上 pp.160-161）。

新約聖書にあるマタイ伝は、遅くとも紀元 85 年頃までには成立したと考えられている。その第 25 章に以下の記述がある。

(32)そして、すべての国民をその前に集めて、羊飼が羊とやぎを分けるように、彼らをより分け、(33)羊を右に、やぎを左におくであろう。(34)そのとき、王は右にいる人々に言うであろう、「わたしの父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受け継ぎなさい」。(41)それから、左にいる人々にも言うであろう、「のろわれた者どもよ、わたしを離れて、悪魔とその使いたちとのために用意されている永遠の火に入ってしまえ」。(46)そして彼らは永遠の刑罰を受け、正しい者は永遠の生命に入るであろう。（出典「聖書日本語」）。

キリスト教では、右は正義・左は罪悪を意味するようになった。したがって、最後の審

判で神は右手で天国を指し、左手で地獄を指すように描かれている。イスラム教の社会でも右・左は同様の意味をもつようになった。食事は右手を、自分自身を拭くときには左手を使っていた。（M.ガードナー 上 pp.161-163）。

なぜ右が良くて、左が悪いのか。その要因はわからないが、右利きの人が多いことが要因かもしれない。利き手の定義は、厳密にはいくつか考えられる。それによって、利き手の比率は変わってくる。一般的に感覚的な比率では、右利きは 9 割と言われている。なぜ右利きが多いのかについても、いくつかの説がある。いまのところ有力なのは、左脳と右脳の機能の違いから説明するものである。左脳は言語機能と結びついている。脳と手を結ぶ回路は途中で交差しているので、左脳は右手と対応している。人における言語機能の強化が右利きを多くしたという考え方である。

(2)　中国における尚左尚右

西洋では右が左より上位とみなされてきたが、それと異なり中国では、左を右よりも上位と考える「尚左」の時期や、逆に右が左より上位である「尚右」の時期があった。儒教は右を、道教は左を尊んだと言われている。道教第三十一章には、「君子、居れば則ち左を貴び、兵を用うれば則ち右を貴ぶ。（中略）。吉事には左を尚び、凶事には右を尚ぶ」との記述がある。孔子や老子の活躍したのは紀元前 6 世紀頃である。

日本への影響で顕著なのは 701 年に制定された大宝律令で、太政官として左大臣・右大臣が設けられ、左大臣が右大臣よりも上位とされた。中国では唐の時代で、尚左の時期であった。なぜ唐の時代には尚左であったのか、推測してみたい。

古代中国における天上と地上に関する宇宙観は、「天円地方」と言われている。その思想は戦国時代末期から前漢にかけて成立したと考えられている。（布野修司『大元都市－　中国都城の理念と空間構造』京都大学学術出版会 2015 年発行 pp.40-41）。天は球形をしていて、天球の頂点は北極星である。これを「北辰」と呼んでいる。天帝はここに居所をもち、その王宮を「紫宮」という。天帝が発する霊力を地上で受けとめるのが天帝の子としての「天子」である。天命を受けて立つ天子は「地」を主宰する。「地」は方形をしており、その中心は天子に従属するので可変である。したがって、天子の居所がある都城は天子が決定し、都城の形状は「地」の相似形である方形で、市壁をもつことになる。「地」が方形であるという発想については、当時の中国の版図が方形であったからという考えがある。（応地利明『都城の系譜』学術出版会 2011 年 pp.66-70）。

都城モデルには、『周礼』を構成する「考工記」に記載されている「匠人営国条」がある。周礼（しゅらい）は周代の官制・行政組織を記した書であるが、後漢以降に編纂されたものが伝わっている。匠人営国条における都城モデルの全体は、「匠人営国、方九里、旁三門。国中九経九緯、経涂九軌。左祖右社、面朝後市。市朝一夫」である。この解釈はいろいろあり、すっきりと体系的に図式化できていない。ただし各案に共通しているのは、

碁盤目状の区画、および王宮が都城内の中央に位置していることである。文章の解釈は布野修司(2015)によれば、「都城は 9 里四方で、各辺に 3 つの門がある。南北、東西にそれぞれ 9 条の道路がある。南北道路の幅は車 9 台分なので 72 尺となる。左に宗廟、右に社稷を置く。宮廷は外朝に面し、市は後方に置く。市と朝はそれぞれ広さ 100 歩四方である」。（布野修司『大元都市 ― 中国都城の理念と空間構造』京都大学学術出版会 2015 年発行 pp.99-101。応地利明『都城の系譜』学術出版会 2011 年 pp.71-72）。

右を左より上位とみなすことは、右利きが多い人類にとっては自然なことに思われる。それに対し、左を上位とみなすには、それが習慣化するまでには強力な社会システムが必要になるであろう。その一つが「天子南面」思想である。天子は北を背にして、南に向かって座すことを言う。天子南面の思想は『易経』第五章の「聖人は南に面して天下に聴いて、明に向かって治める」から由来すると言われている。易経は『周易』とも言われ、紀元前 500 年頃にはすでに成立していたと考えられている。天子が南面すれば、その左手は東を向く。東は太陽が昇る方向であり、世界共通に東は聖なる空間とみなされてきた。太陽が沈む西は、その逆に闇の空間であり、死者の空間である。匠人営国条では、左に宗廟・右に社稷を置くとあるので、左が上位であると解釈できる。しかし、尚左の考えが社会に膾炙していたかは別問題である。

中国を最初に統一した秦、ついで前漢・後漢の時期は尚右とみなされている。それ以降の六朝・隋・唐・宋は尚左と言われている。したがって、天子南面だけでは尚左を説明できない。キリスト教では、聖書に右が上位と記されている。神の言葉は絶対である。中国には、そのような神はいない。神に代わるものとして、天子が絶対的な存在であり、天子からみて視覚的に左側が上位である状況を作る必要がある。ひとつは、天子が南面する位置が問題になる。都城内では、すべての臣下・臣民は天子に向かって拝謁する位置関係でなければいけない。天子の後方にいる位置は許されない。そのような状況にするには、王宮は都城の北端に位置するのがよい。北闕（ほっけつ）型の都城である。もうひとつは、都城内が南北に左・中央・右と帯状に区画され（南北縞帯）、左側に上位の建物、右側に下位の建物が配置されなければいけない。すなわち、南北中軸線が強調されるように建物や道路が配置される必要がある。

周礼モデルである中央宮闕から北闕に変化するには、北方遊牧民族の社会組織が必要であった。北方遊牧民族の住居は移動式で、モンゴル語でゲルと呼ばれる円形のテントである。北風を避けるため、入口は南側にある。したがって祭壇は入口から一番遠い北端に設置されている。テント内は祭壇と入口を結ぶ線を中心として、左中右に 3 区分される。（応地利明『都城の系譜』学術出版会 2011 年 pp.343-345）。それとの類似で、北方遊牧民族は「君主を中央におく左右両翼体制」をとって中国へ南進していった。それが北闕型都城に相似していた。それだけでは中国において正統性が得られないので、遊牧民族に由来する王朝は漢化し、中国古来の思想に依拠しながら都城を造営する必要があった。後漢以降の中国史では、三国時代・晋・五胡十六国・南北朝から隋・唐へと変遷する。南北朝時代

の北魏は、遊牧民族である鮮卑族の拓跋部という集団が建国し、北闕型都城を造営した。その後の隋・唐は鮮卑族が中核を担っており、北闕・南北縞帯であり、中国古来の思想にも依拠する都城を完成させた。唐が尚左になった要因は、そのように考えられる。以下、唐までの中国史を概略しよう。

ちなみに、宋以後の元は尚右、明・清は尚左と言われている。これについては後述しよう。

(3)　唐までの中国王朝

初めて中国を統一した王朝は紀元前 221 年の秦である。ついで紀元前 206 年～紀元後 8 年の前漢である。前漢を興したのは劉邦で、同じ頃、北方の遊牧民族である匈奴を統一したのが冒頓（ぼくとつ）である。匈奴の軍事組織は騎馬軍団を主とした強力なものであった。

匈奴国家の特徴は、十進法による軍事・政治・社会組織であること、南面して左・中・右となる三大分割体制で、君主を中央におく左右両翼体制であったこと、領民・文地をもつ 24 人の万騎たちによる連合権力体であったこと、である。中央の単于（ぜんう。君主に相当）のもとに、東（左）2 人、中央 2 人、西（右）2 人の王・侯がいる。さらに、各王・侯のもとに 4 人のリーダーがいる。計 24 人の万騎がいて、それぞれが数千から一万の騎兵を供出できる社会組織をもつ集団であった。その連合権力体が匈奴国家である。ただし、万騎の数え方には異論もある。肝心なことは、上記の社会組織は中央ユーラシアに興亡する遊牧国家に多く認められる共通項になったことである。2 世紀後半に匈奴の旧領を支配することになった鮮卑王もこの社会組織を踏襲し、領域を東・中・西の 3 部として号令した。（杉山正明『遊牧民からみた世界史』日本経済新聞社 1997 年発行 pp.129-139）。

軍団を編成するときには、オグス・カガン（オグス族皇帝）を参考にしたと考えられる。彼はユーラシア大陸中央部に居住していたチュルク系遊牧集団の始祖的軍事指導者とされている。軍団は南に向かって進軍する。その編成は中央奥の北端に皇帝が構え、左右両翼にそれぞれ 3 人の将軍がいる。各将軍も北端に座している。各将軍のもとにそれぞれ 4 個の軍団が配属されている。軍団の総数は 4×3×2＝24 である。その構図が都城に反映され、王宮が北に位置し、南に開く北闕型になった一因ではないか、と推測されている。（応地利明『都城の系譜』学術出版会 2011 年 pp.345-349。杉山正明『モンゴル帝国と長いその後』講談社 2008 年 pp.88-91）。

当初、匈奴国家は前漢より優位にあった。漢の武帝（在位紀元前 141 年～紀元前 87 年）はその関係を逆転するために、50 年間にわたって匈奴に戦いを挑み続けた。それにより、漢・匈奴ともに内紛が起こり、国家体制は弱体化した。武帝の死去により、両国家は和睦した。（杉山 1997 年 pp.149-154）。

王莽は前漢を倒し、新（紀元後 8 年～23 年）を建て、ふたたび対匈奴強硬策に転じた。しかし、豪族や農民の反抗にあい、新は短期間で崩壊した。その後、後漢（紀元後 25 年～

220 年）が再建された。結果として、漢王室と匈奴およびその後継国家との間には、トータルで約 300 年間の平和共存の期間があった。（杉山 1997 年 pp.158-161)。

平和共存のなかで、匈奴と漢の二種の帝国は解体へと向かった。匈奴は連合組織体であったので、さまざまな分裂をした。後漢滅亡後、魏呉蜀が鼎立する三国時代になった。そのときの魏を「曹魏」という。これを統一したのが西晋（265 年～316 年）である。（杉山 1997 年 pp.167-181)。西晋は永嘉の乱後、匈奴の後裔により滅ぼされた。西晋の皇族が江南の地に再興したのが東晋（317 年～420 年）である。西晋の滅亡後、しばらくして鮮卑系拓跋部が建国したのが北魏（386 年～534 年）である。北魏は華北の統一政権に成長したのち、東魏と西魏に分裂し、さらに北斉と北周に名を変えた。その北周から実権を奪ったのは外戚で鮮卑族の楊堅であり、随（581 年～618 年）を建国した。唐（618 年～907 年）を建国した李淵および2代･3代の母親は鮮卑系であり､名臣も鮮卑系拓跋部の出身であった。したがって、随・唐と続く政権の中核となっていたのが、鮮卑系拓跋部であった。（杉山 1997 年 pp.200-209)。

ここで鮮卑について記述しよう。紀元前 700 年前後から紀元前 200 年頃に、内モンゴル周辺に住んでいたのが東胡である。東胡は匈奴国家を統一した冒頓によって滅ぼされた。その生き残りが鮮卑と烏丸（うがん。烏桓とも書く）になった。したがって、鮮卑は紀元前 200 年頃から中国北部・東北部に居住していた騎馬民族ということになる。鮮卑はいくつもの集団からなる大勢力になった。拓跋・宇文など、その集団を「部」という。3 世紀後半、鮮卑諸族は部ごとに一斉に南下して漢人の国を征服した。やがて、その中の拓跋部が北魏を建国した。（杉山 1997 年 pp.192-195)。

(4)　都城の変遷

初めて中国を統一した秦王朝の都は長安に置かれた。現在の西安である。黄河支流の渭水の北岸にある咸陽と呼ばれる土地である。都城を造営するには何らかの正統性が必要であった。『史記』天官書には、天帝を中心に天上にも官職があるとしている。秦始皇帝は、天と地を照応して諸宮の配置をした。王とその家族が住む「宮」は、政務を執る「朝」と住まう「寝」とに分けられる。それに対応して、陵墓には「廟」と「寝」がある。秦の都咸陽は、これらの建造物が宇宙のミニチュアとして構想された。ただし、市壁をもたない都市であったという。（布野修司『大元都市 ― 中国都城の理念と空間構造』京都大学学術出版会 2015 年発行、p.169・p.183・p.232）。

前漢の長安城は始皇帝の都城を引き継ぐ形で、渭水の南岸に建設された。それゆえ、空間構成に明快な秩序を見いだすことはできない。秦の都城との違いは、都城を囲む壁を設けたことである。秦の興楽宮を修復した長楽宮と、その西に位置する中心宮殿である未央宮があり、建物配置は東西軸が主であった。（布野修司 p.186・pp.198-201）。

後漢王朝は長安を捨てて洛陽に都を置いた。その後も洛陽には、曹魏・西晋・北魏の都が置かれた。洛陽は長安から直線距離で約 350km 東の地点にあり、その間に難所

である函谷関がある。後漢の建物配置では北宮と南宮があり、南北軸が強調されるようになってきた。（布野 p.204）。

三国時代の曹魏以降の都城で特徴的なのは、「太極殿」という名称の宮殿が造られたことである。「太極」の内容については後述する。太極殿は後漢洛陽の南宮の場所に造られた。太極殿の構成は、前殿に東堂・西堂が左右に付属する形式である。太極前殿は皇帝の即位・葬儀・大朝会など大規模な儀礼と祭祀の執行空間である。太極東堂は皇帝の日常の執務空間、太極西堂は皇帝の私的空間であった。後漢洛陽では、皇帝が直接臨席して政治決済を行う前殿と、官僚が合議して皇帝に上奏案文を作成する朝堂は未分化であった。太極殿が朝政の中心として機能することにより、南宮＝朝廷、北宮＝宮城という二宮制が成立した。これにより南北中軸線が強くなってきた。（布野 pp.205-206）。魏晋の都城については不明なことが多いので、北魏の平城および洛陽城について記述しよう。

北魏は北方遊牧民族である鮮卑系拓跋部によって建国された。398 年に道武帝は皇帝に即位し、都を平城に造営した。（応地利明 pp.258-260）。平城は現在の山東省大同にある。そのとき参考にしたのが鄴（ぎょう。河北省にある地名）の北城である。北城は北闕型都城の最初で、方格状に区画された街区であった。（応地利明 pp.292-293）。

第 7 代孝文帝は 471 年に 5 歳で即位した。新政を開始するまでの 20 年間に、北魏では遊牧生活から農耕社会への転換が試みられた。493 年、孝文帝は都を平城から洛陽に移し、かなり強硬な漢化政策をとり、中華文化への同化を計った。都城全体は宮城・内城・外郭城の 3 つの郭域によって構成されている。内城は外郭城の中央北寄りに、宮城は内城のやや北西寄りに位置している。宮城から内城南壁の宣陽門を結ぶ銅駝街が南北の中心軸であり、その左右に諸官署が配置されている。街路・街区の構成は碁盤目状に近く、条坊モデルの原形になった。（布野修司 pp.223-224。応地利明 pp.298-299）。

北魏の後継国家である北周から、随唐の都城への移行には大きな変化があった。それまでの太極殿は前殿・東西 2 堂形式で、西堂－太極宮－東堂という東西軸構造であった。それが隋唐では、内朝－中朝－外朝という南北軸構造の三朝制に変化した。唐長安城では、皇帝の日常的朝政の場である内朝としての両儀殿、臣下を朝見する場である中朝としての太極殿、外朝としての承天門・朝堂という構成になった。これにより、内朝・中朝がある宮城と、外朝がある皇城が横街という広い街路で分離されることになった。（布野修司 pp.235-238）。

随唐の長安城について記述しよう。（随唐長安城の記述は、応地利明『都城の系譜』pp.323-379、布野修司『大元都市 ― 中国都城の理念と空間構造』京都大学学術出版会 2015 年発行 pp.239-275、および王維坤「長安城のプランニング」『しにか 1999 年 9 月号』大修館書店 pp.20-27 を参照した。）。隋は漢長安城を廃し、さらに南に位置したところに大興城を造営した。唐は大興城を拡張し、長安の都を造りあげた。企画設計したのは随初代の楊堅に仕えた鮮卑系宇文部の宇文愷（うぶん・がい）である。ちなみに楊堅にも

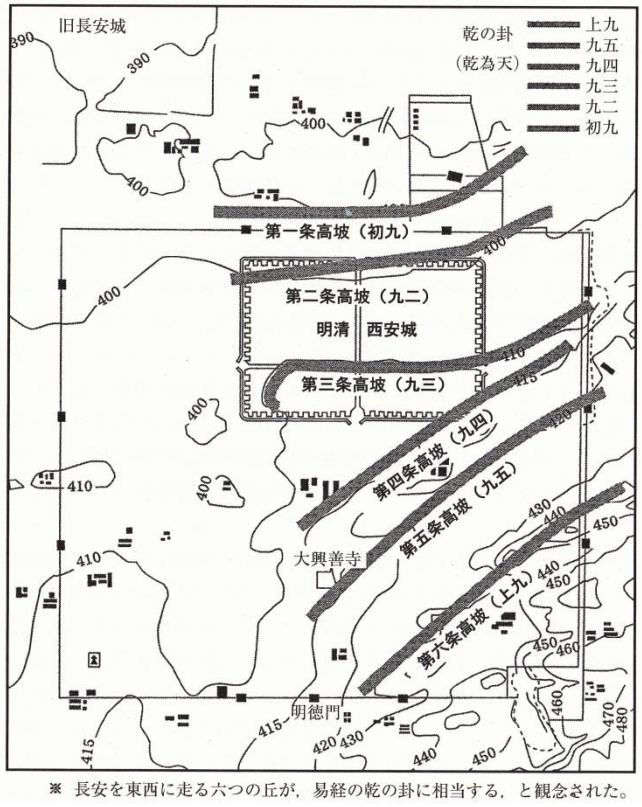
鮮卑の血が入っていると言われている。宇文愷は長安の南に位置する 6 つの丘に注目した。そのうち、北寄りの 3 つの丘は東西に走り、南寄りの 3 つの丘は南西－北東方向に走っている。標高は北より南が高く、北 1 番目と南 6 番目の高低差は 50m である。宇文愷は 6 つの丘を易経にある陰陽思想に従い解釈した。

「太極」は万物の根元であり、「気」の元で「元気」とみなされている。原初の混沌状態から光あふれる陽の気が上昇して天になり、重く暗い陰の気が下降して地となった。すなわち、太極を構成する 2 つの気が分かれて陰と陽という両儀が生じた。これらは隔絶したものではなく、互いに絡み合っている。したがって、陰と陽が中和された状態が太極とも言える。その陰と陽がさらに 2 つずつに分かれ春夏秋冬という四象が生じ、また 2 つずつに分かれ八卦が、さらに六十四卦が生じる。これとは別に、混沌から太極を経て木火土金水という 5 種の元素が生成されたという五行説がある。この 2 つの考え方が融合して、すべての現象を説明しようという陰陽五行説が成立した。ちなみに、木は春・青（緑）・東、火は夏・朱（赤）・南、土は黄・中央、金は秋・白・西、水は冬・玄（黒）・北に対応している。

八卦や六十四卦では、陰か陽という爻（こう）をみる。6 つの爻を引いたとき、下から上に向かって順に「初・二・三・四・五・上」と数える。陽は「九」で、陰は「六」で表す。6 爻ともすべて陽である場合、「初九・九二・九三・九四・上九」になる。八卦で陽が 3 つ出るケースを「乾」という。六十四卦で「乾乾」と出るケースは純粋な陽を表し、天・龍・帝王を意味する。

宇文愷は 6 つの丘に、北の「初九」から南の「上九」までを当てはめた。初九の丘に外郭城の北側北壁をあてた。易経に九二は「見龍田に在り」と記されている。潜んでいた龍が世に現れることから、宮城を置いて皇帝の居とした。その位置は天帝が居住する北極星と霊力で繋がっている。九三に官衙を置き皇城とした。九四には権力者の邸宅、九五には寺院を置いた。上九の丘の外側には居住地を設けず、池を開き東南の守りとした。それを囲むように外郭城南壁を設けた。（応地利明 pp.350-353）。

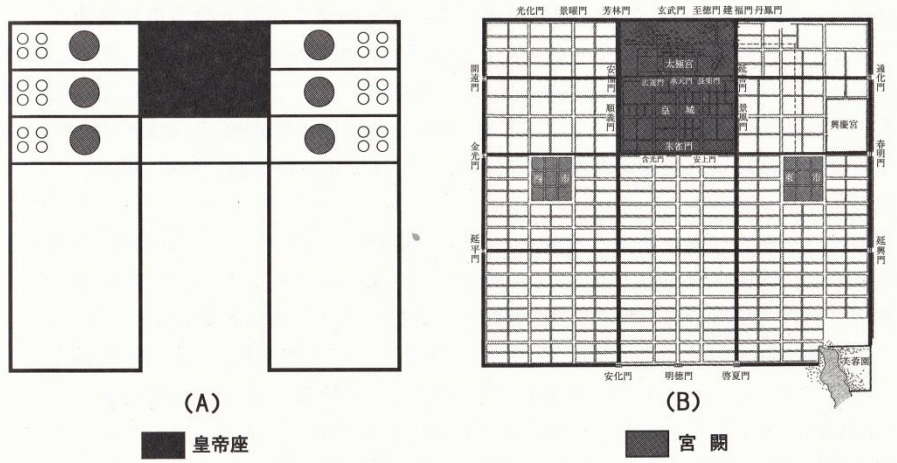
図 6-1　随唐・長安の等高線分布と 6 つの丘



（出典）応地利明『都城の系譜』pp.351

都城の基本は、オグス・カガンの軍団編成を考慮したと考えられる。図 6-2 (A)は軍団編成図で、中央北端に皇帝の座がある。左右両翼には各 3 人の将軍と、各将軍が統括する 4 軍団を配している。これは、隋王朝に先行する北周の開祖・宇文泰が設置した「西魏二十四軍」に至るまで、北方遊牧集団の軍事組織の原理であった。宇文愷はこの組織原理に精通していたと考えられる。(B)の隋唐長安城と(A)を比較すると、相似形であることがわかる。

図 6-2　オグス。カガンの軍団編成(A)と随唐長安城の基本構成(B)



（出典）応地利明『都城の系譜』pp.347

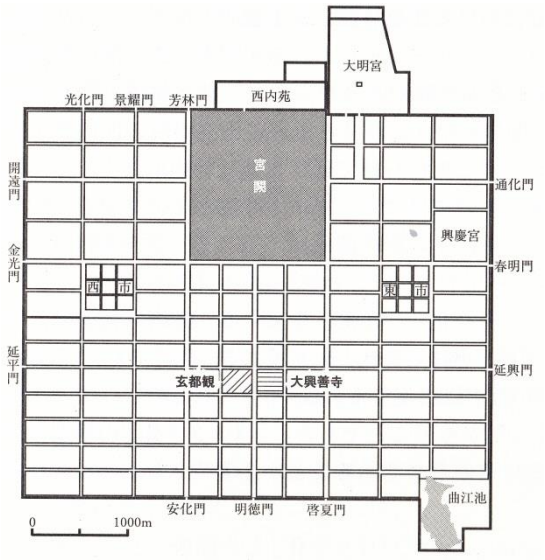
都城の詳細部分は『周礼』「考工記」の理念が考慮されている。応地利明(2011)は、理念を 8 項目に整理した。そのうち「方九里」と「中央宮闕」は随唐長安城には当てはまらないが、「左祖右社」など 6 項目はおおよそ理念に該当すると結論している。したがって、随唐長安城は、北方遊牧民族の軍団組織原理を都城の基本としながら、詳細な部分で中華文化の思想に依拠して造営されていると言ってよい。

図 6-2(B)をみれば、随唐長安城は南北に左・中央・右と縞帯になっていることを読みとれる。ここでの左右は南面する皇帝からみてのものである。したがって、左側は東、右側は西である。尚左が表現されている点をいくつか述べよう。宮城の中心軸は北の玄武門から南の承天門に至る線であり、その線上に両儀殿・太極殿などが連なっている。その左側に東宮が、右側に掖庭宮（えきていぐう）がある。東宮は皇太子が、掖庭宮には皇妃などが居住する。東宮が上位である。太極殿の左側に門下省、右側に中書省がある。門下省が上位である。（応地利明 pp.368-370）。承天門から出て横街を抜け皇城に入る。承天門街を南下する。皇城の出口に近い左側に太廟、右側に大社がある。王家祖先の祖廟が左、土地と農耕の神のための社稷（しゃしょく）が右である。周礼にある「左祖右社」を表現している。朱雀門から皇城を出て明徳門に至る朱雀大街を進む。左側に仏教寺院である大興善寺が、右側に道教寺院の玄都観がある。仏教寺院が上位である。ちなみに、随では太極殿という名称は用いず、大興殿と呼んだ。都城の構成は北端の玄武門から南端の明徳門まで左右対称であり、南北中心軸線がはっきりしている。（応地利明 pp.371-373）。明徳門から都城を出ても、朱雀大街の南伸線は韋曲付近まで続いている。（応地利明 p.356）。

長安城の地形は、南東方向である左奥が高く、宮城が在るところは低湿な場所であった。則天武后は左北側にある大明宮を居所とした。また、玄宗皇帝は皇城の左側にある興慶宮を政治の中心にした。それにより、官僚たちは左側（東）地区に居所を設けるようになった。反対に右側（西）地区は庶民街になっていった。東市・西市もそれに対応する物品を扱うようになった。（布野修司 p.245・応地利明 p.353）。

隋唐長安城において北闕型・南北縞帯の都城が完成し、尚左思想が社会に浸透した。遣唐使を派遣した日本の都である平城京や平安京にも、その影響が及んだ。

図 6-3　随唐長安城



（出典）応地利明『都城の系譜』p.373

唐王朝の崩壊以降、中国の都城は北宋の開封、南宋の杭州、元の大都（北京）、明の南京から北京、さらに清の北京へと推移した。

開封の都城は大内（宮城と皇城）・内城・外城が 3 重の「回」字になった入れ子構造をしている中央宮闕型であった。大内の北側に宮城が南側に皇城があり、横街で南北に二分されていた。宮城の中心は紫宸殿であり、皇城の中心は大慶殿である。大慶殿の左（東）側に明堂がある。明堂には祖神が祀られている。宣徳門から大内を出て、内城から外城を貫く南北軸線が御街である。隋唐長安城では各区画を壁で囲う防墻制であったが、その仕組みは崩壊していた。御街の両側には、後年禁止はされたが、商人が店を出していた。この御街は南郊祭祀の主要な舞台であった。祭祀はほぼ規則的に 3 年に 1 度行われ、皇帝が都城内を巡幸し、都市住民に見せる都市祭礼であった。祭祀は 2 ヶ月前のリハーサルから始まった。大内南の宣徳門から外城南端の南薫門までを、象と車が往復した。本番は冬至までの 3 日間で、大慶殿や内城東部にある大廟を起点に行われた。（布野修司 p.326-330）。

開封の都城では、随唐長安城で尚左の条件と考えてきた北闕型・南北縞帯は崩れている。しかし、尚左思想はすでに中国文化の伝統になっていたと考えられる。明堂や太廟を左（東）側に位置し、祭祀を住民に見せる演出をしていることで、尚左思想は十分に保たれていたと想定される。

元の時代は尚右であったと言われている。モンゴル帝国はユーラシアにまたがる大帝国であった。チンギス・カーンは遊牧民族の伝統である左右両翼 24 軍の体制をとっていた。チンギス・カーンを中心に、右翼は 3 人の息子が、左翼は 3 人の弟が軍団を担当していた。（布野修司 p.274・杉山正明「モンゴル帝国と長いその後」p.90）。この場合、直系である息子が弟より上位である。したがって、当初から右が尊重されていたと言える。中国王朝である元もその思想を引き継いだと推測される。

明は 1368 年に南京を首都とした。南京の都城は『周礼』「考工記」の理念を十分に吟味したと考えられる。したがって、「左祖右社」も実現されている。それは 1421 年に永楽帝により北京に遷都されても、引き継がれることになった。（布野修司 pp.406-408）。明北京城は宮城を皇城が囲み、さらに内城が囲む入れ子構造になっている。外城は内城の南に接して位置している。左右を表現する建造物を記述しよう。宮城の南前左に太廟が、右に社稷がある。太廟が上位である。内城の左（東）外側に日壇が、右（西）外側に月壇がある。日壇が上位である。外城の南北中心軸の左に天壇が、右に地壇がある。天壇が上位である。（布野修司 pp.511-514）。ただし、天壇と地壇はその後合祀された。（村田治郎「明堂略史」『日本建築学会論文報告集』第 60 号、昭和 33 年）。清朝は明北京城を引き継いだ。宮城は現在、故宮あるいは紫禁城と呼ばれている。故宮前に位置するのが天安門広場である。（布野修司 pp.584-591）。明清時代には尚左思想が復活したと言える。

(5)　日本の都城

日本における最初の都城は藤原京である。天武・持統天皇の時代に造営され、694 年に飛鳥浄御原宮から遷された。それ以前の都城形成への過渡的な段階においても、尚左の観点からみる「天子南面」思想があったと推測される。600 年に第 1 回遣隋使が派遣された。その結果の対応として、603 年冠位十二階や 604 年十七条憲法の制定が行われた。それと同時に 603 年に小墾田宮が造営された。ここでは天子南面思想が採用された。（応地利明 p.389）。その後、飛鳥浄御原宮においても天子南面思想がみられる。（応地利明 p.394）。

藤原京は広い都城域をもち、碁盤目状の条坊制であったと考えられている。宮域は都城の中央に位置する中央宮闕であった。藤原京を造営していたときには、北闕型の随唐長安城は存在していた。なぜ藤原京が北闕型でなかったのか。遣唐使の派遣が中断されていた時期であり、長安城についての最新情報が欠けていたとか、あえて周礼を参考にして理想型を求めたとか、いくつかの考え方がある。

宮域内は東中西と 3 区分され、中央帯に北端から南端へ、内裏－大極殿－朝堂院が配置される三朝制であった。（応地利明 p.401）。大極殿と朝堂院が宮域内に配置されたことにより、各豪族が自分の居所で職務を行うのではなく、朝堂院に勤務することになった。それは王権力を強化することに繋がった。（応地利明 p.420）。中国の都城と異なる点として、中国では都城を囲む塀があるが、日本にはない。異民族からの攻撃を想定する必要がなかったからである。細かい点として、中国では「太極殿」というが、日本では「大極殿」という。

710 年に平城京へ遷った。701 年に遣唐使が復活し、随唐長安城の情報をもとに、北闕型で条坊制の都城が造営された。藤原京から遷都した要因はいくつか考えられる。一つは北闕型にすることであった。また、藤原京は宮域が置かれた場所が低湿地で、排水条件が悪く公衆衛生に問題があったことである。（応地利明 p.434）。

平城京の特質をよく表現するものは、中央北端に位置する宮域と、その正面である朱雀

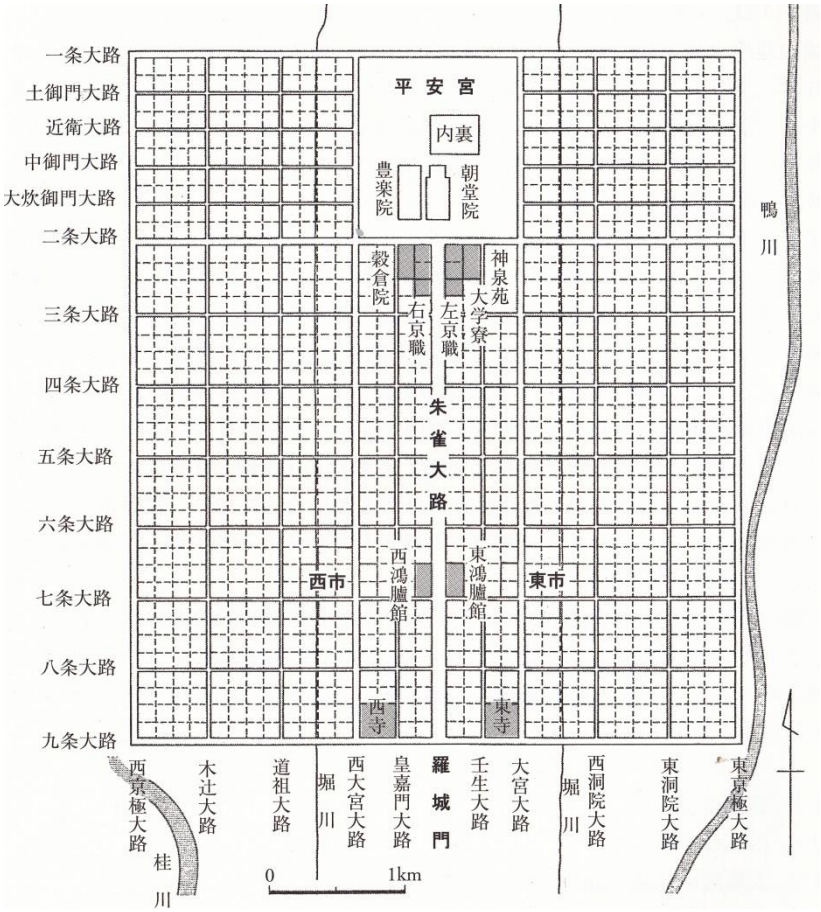
門から都城南端にある羅城門までを直走する朱雀大路である。路面幅 67.5m、両側の側溝幅 7m、全長 3800m で、側溝の外側に連続する築地塀が壮大さを演出していた。（応地利明 p.431）。これにより左京・右京が明確に区別されていた。また、右京には山地・丘陵が多く、それに対し、左京は平坦な地形であり、「外京」は左京の外延に造られた。（応地利明 p.433）。外京も含め、左京は平坦な土地が広がって居住環境に優れており、左上位を明示することになったと推測できる。

平城京は随唐長安城の単なる模倣ではなかった。そのひとつが外京の存在である。なぜ外京があるのか。外京には藤原氏の氏寺である興福寺や、蘇我氏の元興寺、紀氏の紀寺、佐伯氏の佐伯院、葛木氏の葛木寺など、旧豪族の建立になる私的な氏寺がある。これらを本来の京域から排除するための空間であった。本来の京域には天皇・皇后の勅願などによって造営された官寺が置かれた。（応地利明 p.451）。

桓武天皇は 784 年に長岡京に遷都した。しかし、その 10 年後の 794 年に平安京にさらに遷都した。平安京の都城は北闕型で条坊制である。都城の東端は、鴨川手前を南北に走る東京極大路である。西端は桂川の手前にある西京極大路である。北端は宮域北側に接する一条大路、南端は九条大路である。宮域は都城を東中西に 3 分割した中央帯の北端にある。宮域の中央南端に朱雀門があり、そこから南に直走する朱雀大路がある。それが九条大路と交差する所が羅城門である。朱雀大路を宮域内に延長した中軸線上に朝堂院があり、すぐ北側に大極殿がある。さらにその少し右奥に内裏がある。（応地利明 pp.477-484）。

平安京を左右の観点からみよう。大極殿で南面する天皇からみて、朱雀大路より左側（東）の都城域内が左京であり、右側（西）が右京である。平安京が造営された当初は、右京は湿地帯であった。五位以上を貴族という。平安時代初期の貴族の邸宅は、五条以北の左京に集中していた。天皇の私的空間である内裏はしばしば焼失した。そのつど仮の居所である里内裏に住んだ。里内裏の所在地は当初、左京一条にあった。ところが次第に南下していき、981 年には四条院、1076 年には六条院、12 世紀後半には八条殿にまで遷御した。現在、京都御所と言われる場所は、大内裏があった所より東に 1.5km 行った、烏丸通に面し丸太町通と今出川通に囲まれた位置である。14 世紀の南北朝時代に東洞院土御門（ひがしのとういんつちみかど）が里内裏になり、北朝と呼ばれる持明院統の天皇家が居住するようになった。その場所が京都御所になった。ちなみに南朝と呼ばれる大覚寺統の天皇家は二条富小路内裏に住んでいた。（西山良平「平安京とはどういう都市か」日本史研究会・京都民科歴史部会編『京都千二百年の素顔』校倉書房発行 1995 年 pp.147-179）。

図 6-4　平安京



（出典）応地利明『都城の系譜』pp.479

左が右より上位であるという尚左の観点からは、天子南面思想が肝要である。藤原京－平城京－長岡京－平安京と続く日本の都城のうち、宮域内における内裏・大極殿・朝堂院の配置をみよう。内裏は天皇の私的空間である。大極殿は天皇が出御し、臣下に南面して立ち、王権を顕示する儀式空間である。朝堂院は臣下である官人が政務の補助をし、天皇が政務を行う空間である。

天子南面からみると、大極殿が朝堂院のすぐ北に位置していなければならない。この条件は４つの都城で満たされている。できれば、朱雀大路を宮域内に延長した都城中軸線上に位置することが望ましい。奈良時代後期の平城京はこれを満たしていない例外であるが、右京が狭いので、朱雀門ではなく壬生門が都城中軸線に相当する。その意味では満たしていると言える。したがって、すべての都城において中軸線上に朝堂院があり、そのすぐ北側に大極殿がある。

さらに、都城中軸線上の北から南へ内裏－大極殿－朝堂院と列べばよいが、満たしているのは藤原京と奈良時代後期の平城京だけである。その他は、大極殿で南面する天皇からみて左側に内裏がある。（応地利明 pp.399・438・471・481 にある宮域内配置図を参照）。

日本では、本格的な都城が出現した頃から、隋唐の影響を受けて尚左思想が浸透してい

ったと言える。

(6)　尚左の現れ

a)　並び方

薬師寺に行くと、薬師三尊を参拝する。薬師如来は脇侍として、日光菩薩と月光菩薩を従える。薬師如来からみて（即身的）、左に日光菩薩が、右に月光菩薩がいる。尚左という観点からは、左脇侍が右脇侍より上位になる。このように中尊と両脇侍からなる三尊形式は多くみられる。釈迦如来は左に文殊菩薩、右に普賢菩薩を、阿弥陀如来は左に観音菩薩、右に勢至菩薩を従える。この形式は如来に限らず、不動明王などでもみられる。

三尊形式に限らず、山門に存置される仁王像も位置が決まっている。口を開いた阿形（あぎょう）は本尊からみて左に、口を閉じた吽形（うんぎょう）は右に置かれる。ただし、東大寺南大門は逆である。時代によって、左右を即身的に見るのか、対向的に見るのか、混乱することがあった。浅草寺雷門の仁王像も逆に存置されている。江戸時代の浮世絵では本来の位置であった。狛犬や沖縄のシーサーの位置も同様である。

内裏雛も本来は雛自身からみて（即身的)、男雛は左、女雛は右である。したがって、対向的には男雛は右、女雛は左に置かれた。しかし現在は、即身的に男雛は右に、女雛は左に置かれる。これは昭和天皇の即位時に、西洋風に天皇が右に、皇后が左に並んだことから、それを踏襲するようになったと言われている。西洋では右が上位であるので、即身的に上位者が右に、下位者が左に位置している。結婚式での新郎・新婦の位置は西洋式である。

太陽と月も、即身的に太陽は左に、月は右に描かれることになる。「金烏玉兎」、すなわち烏は太陽の中に、兎は月の中にいるという中国の伝説から、太陽・月と同じ位置に描かれるはずである。この場合の烏は脚が 3 本ある八咫烏（やたがらす）である。

尚左の観点からみれば、左が上位、右が下位である。しかし陰陽説からみれば、別の考えも成り立つ。太陽は陽であり、月は陰である。この場合、陽が上位で陰が下位とも言える。しかし別の見方では、陽と陰は補完関係にあり、融合して太極という一つの世界を造っている。したがって、陽と陰は同等であるとも言える。日光菩薩と月光菩薩が揃うことにより、薬師如来を支えている。尚左思想が強くなければ、両者が同等であると考えてもよい。

b)　服装

和服を着るときは、自分からみて左の衽（おくみ）を右の衽の上に重ねる。相手からみれば右の衽を左の衽に重ねる。これを右衽（うじん）あるいは右前という。その逆の着方を左前と言い、亡くなった人に着付ける。

埴輪をみると、古代日本では男女とも左衽であったと推察される。養老 3 年（719 年）に右衽の令が百姓にいたる迄すべての人に命じられた。この変更は、その前年に帰国した遣

唐使がもたらした唐王朝の制度に寄り添うためであった。しかし、実際に徹底されるまでには時間がかかった。この表現は日本の政権が及ぶ範囲の話であり、北のアイヌや南の琉球では、近年まで右衽でも左衽でも決まりはなかった。（菊池勇夫『アイヌと松前の政治文化論－境界と民族』校倉書房 2013 年発行 pp.275-280）。

漢民族の服装は右衽であったが、北方遊牧民族は左衽であった。騎馬で闘う遊牧民族は、短衣で身体にぴったりした上半身と、下半身は長いズボンと革靴の活動しやすい服装であった。漢人はこれを「胡服」と呼んでいた。紀元前 300 年頃の戦国時代、趙の武霊王は騎馬で闘うことを考え、胡服着用を奨励した。なかなか浸透しなかったが、時代を経て胡服を右衽に直して着用するようになった。

右衽は即身的には、左の衽を右の衽の上に重ねる着方であるので、左上位とも考えられる。しかし、尚左のときも尚右のときもあった漢民族が古来より右衽であったことを考慮すると、尚左思想とは関係ないと想定した方がよいであろう。次に述べる洋服もあわせて、服の着方に尚左尚右は無関係だと考えたい。

（以下の記述は次の文献を参考にした。J.Lopez “Buttonholes : Some Differences in Gender-related Front Closures” *Dress :The Journal of the Costume Society of America*,1993 pp.74-78。丸山健夫『謎山トキオの謎解き分析』日科技連出版社 2010 年 pp.77-86）。

西洋では昔から、どちらの衽を上にするかという決まりはなかった。ボタンは装飾品であった。ボタンホールが出現してはじめて、ボタンは衽と衽を結びつける機能をもった。17 世紀頃、ボタンは男の服の前をあわせるために使われるようになった。18 世紀頃までには、対向的にみて、右前のボタン留めが一般的になった。最初のうちは、女性が着るジャケットも、男性と同じようにボタンは右前だった。ところが 19 世紀は、男らしさ・女らしさを追求する時代であった。そこで女性のボタンのつけ方を反対にすることにした。19 世紀後半になると、女性の服は左前に統一されてきた。表 6-1 より左前の割合をみると、19 世紀半ばに 60～70%であったのが、20 世紀になると、ほぼ左前になっている。

（表 6-1）絵画に描かれた女性衣服の左前と右前の個数

年代	左前 個数	右前 個数	左前 割合%
1860-1869	40	22	65
1870-1879	253	110	70
1880-1889	137	11	93
1890-1899	168	46	79
1900-1909	31	5	86
1910-1919	185	5	97
計	814	199	80

（**出典**）J.Lopez (1993) pp.75 Table 1